

令和3年度 自己評価表

中長期目標 (学校ビジョン)	人と関わりながら自立と社会参加に向けて 努力する子どもの育成
-------------------	-----------------------------------

白兎のあいいうお あ いさつを交わし みんななかよく い のちはひとつ 自分も友達も大切に う んどうをして 健康で元気な身体 え がおっぱい 楽しんで学ぶ学校 お もいやりのある 豊かな心

鳥取県立白兎養護学校

今年度の重点目標	・人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成 ・確かな学びにつながる学習指導の充実 ・児童生徒の健康と安全を守る教育の推進 ・知的障がい教育の専門性の向上・発揮
----------	--

年 度 当 初						評価結果 (1) 月		
評価項目	具体項目	学部 学級	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成		小学部	○人との関わりやコミュニケーションの広がり、相手に思いを伝えること等を目標として取り組んでいる児童が多い。 ○児童の実態に合わせて、学校(保育園)間交流等、地域との交流活動の取り組み方について見直す必要がある。	○授業づくりや指導、支援の方法を工夫することで児童同士の関わりが広がる、児童同士が支え合う姿が見られる。 ○児童の実態に合った地域との交流の仕方を実践する。地域に目を向けた教材や体験活動の実践を重ねている。	○児童の実態に合わせた人との関わり方やコミュニケーションの捉え方、指導、支援の仕方について学部全体で学部会(月1回)を通して共通理解を図る。 ○学校、保育園と連携を図り、交流の仕方について学部教育課程検討委員会(3回予定)検討する。	○個々の実態に合わせた関わり方やコミュニケーション方法を伸ばす支援の工夫を行ったことで、児童同士のつながりや関わる姿が多く見られるようになった。コロナ禍の中、工夫しながら縦割りグループの活動も行い、異学年の児童と関わる姿や上学年児童がリーダーシップを発揮する場面も見られた。学部研修会で指導、支援のあり方を全体で共有することができた。 ○地域を題材にした学習活動に積極的に取り組んだ。外部との交流は、感染症予防のため全面中止としたが、末恒小学校へは本校の児童のことを知ってもらうための教材を作成する等、連携を図った。	B	○本年度培った力をさらに伸ばしていくために、効果的であった支援方法や学習グループ等を確実に引き継ぎ、課題点は改善を図るために生かしていく。短時間で情報共有するための工夫を行う。 ○リモートによる交流や作品の出版等、できる形を探りながら、交流活動のあり方、方法を検討する。
	・地域との連携 ・交流及び共同学習	中学部	○地域とつながる活動や行事等を通して、生徒が達成感を持ち人との関わりが広がっている。コロナ禍における交流のあり方をさらに工夫、検討していく必要がある。	○生徒が人と関わる楽しさや、達成感、自己肯定感・有用感を持ち、主体的に関わろうとしたり、自分の思いを表現しようとしたりする姿が見られている。	○特別活動の時間や各教科等の学習の中で、生徒が一つの目的を持って協力しながら活動したり、自分の役割を果たしたりできるような学習の機会を学期に1回程度設定する。 ○総合的な学習の時間や各教科等の学習の中で、多様な人と関わる場面や、地域とつながる学習の機会を学期に1回程度設定する。	○生徒が目的意識を持ち、人から認められるような学習の機会を設定することで、白兎太鼓やにこにこショップなどで、生徒が一つの目的を持って協力する姿が見られた。 ○総合的な学習や作業学習の時間の中で、コロナ禍で可能な形での交流ができた。一年間オンラインで様々な人や組織と関わることができた。湖東中学校との交流学習では、オンラインで相互に交流することができた。	A	○引き続き生徒が達成感、自己肯定感・自己有用感を持ち、主体的に人と関わろうとする学習の機会を設定する。 ○オンライン交流の良さや課題を整理し、集団学習や人との関わりの機会をどのように設定していくのか検討していく。
	・地域との連携 協働の推進	高等部	○まちづくりワークショップを通して、地域の方と活動する計画を立て、準備を進めている。地域での販売活動や清掃活動を通して喜ばれる経験を積んでいる。 ○日々の学習や実習等を通して、卒業後の生活について学年に応じたイメージを持ちつつある。	○地域の方とともに活動する中で、地域のために働く姿がみられる。 ○生徒、保護者、学校が適切な自己理解のもと、卒業後の生活をイメージしながら進路について考えている。	○地域の教材や人材を活用しながら実態に応じた交流を設定し、地域社会への参加機会を各作業班が3回以上つくる。生徒が、計画・評価をしながら参画する外部との機会を1回以上設定する。 ○個々の強みや課題を明確にし、日々の学習や実習、懇談等で卒業後の姿を確認することで、生徒、保護者、学校が目標の共有を図る。	○各作業班が3回以上販売活動や清掃等計画したが、コロナ禍で中止になりできなかった作業班もあった。希望者ではあるが、公民館の文化祭でも販売活動を行った。また、作業の様子をスライドショーにし、公民館の文化祭で紹介することも行った。生徒は地域の方に喜ばれたり、販売活動で売れたりすることでいきいきと活動する様子が見られた。また、部活動(美術部)では地域の方が講師として指導してくださるなど少しずつであるが交流が広がっている。まちづくりワークショップに向け準備中である。 ○進路説明会を計画するが、コロナ禍で中止になることもあった。進路ガイダンスDVDの作成、個別相談等開催の仕方を工夫した。必要に応じて懇談に進路担当者やSSWも出席し、情報提供を行った。また、実習の振り返りの会や懇談を活用して、卒業に向けて準備していくことなどを保護者と共有することに努めた。	B	○「まちづくりワークショップ」で今年度の反省をいかし、立案、実践する。コロナ禍における交流の在り方をさらに工夫、検討する。
	病院等との連携	訪問学級	○新型コロナウイルス感染拡大予防対策を日々病院関係者との連携をとりながら行っている。そのため、限られた学習環境(物的・人的)の中で、ICT機器を活用して教師や友達等の人とのつながりを意識した学習を組み立てている。外部とのつながりが持ちにくい中で個々の社会の広がりが難しい。	○児童生徒が安心安全に生活し、安定した状態で学習をしている。 ○人や社会とのつながりを楽しみにしている。	○病棟看護師、理学療法士と特に連携を取り、申し受けやリハビリ懇談会で実態把握、共通理解をしながら支援の改善や充実を図る。 ○訪問学級や病院関係者以外の人や社会つながることができるような活動をICT機器の活用や啓発につながる学習を計画していく。	○コロナ感染拡大予防対策として担当の医師、看護師と密に連携ができており、児童生徒が安心安全な状態での学習保障を行っている。教場・ベッドサイドでの学習に対してできることの可能性を模索して授業づくりを工夫している。 ○本校との交流、社会人講師との学習、修学旅行代替え行事等でICTを活用したり、社会とつながる媒介として教員が出向いて動画メッセージや写真等を取ったりし学習に組み込むことで啓発や社会とつながる学習を実施し、児童生徒がつながることを喜んでいる姿が見られた。	B	○引き続き、病院関係者との連携を行い、よい信頼関係を継続できるように努め、その時の環境の中で学習がよりよいものになるように、児童生徒の目標にあった学習について工夫していく。
2 確かな学びにつながる学習指導の充実		小学部	○徹底した実態把握を基に、児童に合った目標設定と授業作り、次の段階を見据えた支援のあり方を考えて実践しようとしている。 ○生活単元学習等の合わせた指導について、新学習指導要領の教科の内容を意識して目標設定、授業作りを進めている。 ○教科の学習についても新学習指導要領を基に教材研究や実践を重ねている。	○児童の実態、段階に応じた指導、支援を重ねている。 ○生活単元学習において、教科の目標や内容が学習計画に明記され、教科を意識した授業が展開されている。 ○教科学習(国語、算数)、課題学習の内容、教材が充実している。	○実態把握の仕方や教科の内容を意識した目標設定、評価の仕方等について学部会で共通理解を図る。 ○教科の学習(国語、算数)や課題学習について、学部会で授業づくりと教材の共有化を行う(学期に2回程度)。	○実態把握のもと、個々の段階に合った目標設定、授業実践をすめた。単元学習計画の作成を通して、新学習指導要領の各教科等の目標、内容を意識した授業づくり、評価の仕方が浸透しつつある ○各自、授業づくりや教材づくりに工夫して取り組んできた。互いに共有し合う機会が少なかった。	B	○研究授業を通して各教科の位置づけや授業づくりの在り方を検証していく(生活単元学習を中心に)。 ○学部全体で共有するための会の設定や共有フォルダの設定など、教師間で情報交換しやすいシステムの構築を図る。
	・ICT機器の活用 ・新学習指導要領に対応した授業研究	中学部	○中学部段階での進路学習の見直しを今年度行うことになっている。学校図書館やICT機器を活用することで身に付けたい情報活用能力を検討する必要がある。主体的・対話的で深い学びを意識しながら授業改善に取り組んでいる。	○生徒が自ら課題を設定し、情報を収集・活用しながら、課題解決したり表現したりしている。	○校内の進路指導担当と連携して、中学部段階で必要な進路学習の内容を見直す。 ○学校図書館やICT機器を活用した学習活動の紹介や中学部段階で大切にすることを学部会や学部研究会を通して共通理解を図る。 ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた子どもの姿や授業改善の工夫について、学部会で年2回共通理解を図る。	○各学年段階で必要な進路学習の内容について、各学年で検討して取り組むことができた。 ○生徒が学校図書館やICT機器を積極的に活用し、調べたいことを自分で選び、資料やインターネットでの調べ学習ができた。 ○教師がICT機器の使い方に慣れるよう、学部でクラスルームを立ち上げ、「Google Meet」や「Google Forms」などを使うことができた。地域の感染レベルに合わせて学級単位でのオンライン学習に変更したが、ICT機器を活用し、生徒の実態に応じた学習内容や支援の工夫に生かすことができた。 ○授業改善を工夫した授業や中学部段階で大切にすることについて、学部会等で共通理解を図った。授業改善について、学習グループ等で適宜確認することができた。	B	○進路について見直しを持って安心して進めることができるよう、教職員が理解し、保護者へ情報提供する機会を設定する。 ○校内進路指導担当等と連携し、各学年で段階を意識して行った進路学習の系統性について整理する。 ○ICT機器の整備の充実を図る。誰もが使えよう、マニュアルを共有したり、教え合ったりする機会を設定する。

2確かな学びにつながる学習指導の充実		高等部	○新学習指導要領をもとに年間指導計画の見直しを行って内容を整理し、昨年度より一部の教科で単元計画書を作成しながら授業を行っている。	○個に応じた目標を設定し、学習評価をしながら、「自立と社会参加」につながる授業づくりが行われる。	○指導内容確認表を活用して個々の実態を明確にし、生徒の実態に応じながら年間指導計画を運用する。ねらいや支援の共通理解を図りながら実践する。	○「個別の指導計画」「年間指導計画」とを確認しながら学習を計画し、進めることができるように、「評価表」を作成した。研究授業時に活用しながら、「自立と社会参加」に迫るよう授業づくりを行った。全教科で実施はできていないが、7回の研究授業で活用しながら個に応じた目標や支援について共通理解を図った。「個別の指導計画」「学習・評価」「評価表」など内容が重複したり、書式が複数にまたがることで、記入しづらいことが課題であった。	B	○引き続き「個別の指導計画」「年間指導計画」をもとに、集団学習の中で個に応じた支援や手立てを考えながら授業づくりを行い、3観点に即した評価についても研究をする。
	・児童生徒の適切な支援につながる記録等の整理	教務部	○児童生徒に対する適切な支援をめざして、現在、個別の諸計画をはじめとして、各分掌から出ている実態把握、年間を通じた様々な指導の記録等が多数ある。内容的に重複しているもの等、一見してわかりにくさもあり、日々の指導につながるものにしていく必要がある。	○書き物が目標設定のよりどころ、児童生徒理解や日々の支援につながるものになっている。 ○書き物が一貫で分かり、児童生徒の様子について検索しやすくなっている。	○学部や分掌の意見を集約し連携しながら、内容の整理、記述の簡素化、項目の削減等を行う。 ○書き物の用途(項目)、保存場所、記録者、担当分掌などが分かる一貫の作成をする。	○書き物の用途・名称・時期・保存場所・記録者・担当を一覧にした「児童生徒に係る書き物 一覧表」を作成し、1年間における諸々の記録が一目で分かるようになった。 ○既成の評価や記録について、評価や記録が上手く活用されておらず、つながりという視点において課題が見えてきた。	C	○「児童生徒に係る書き物 一覧表」の周知・活用を図る。 ○児童生徒に関わる様々な書き物について、つながりを意識した視点で整理する。
	・新学習指導要領に対応した授業研究	研究部	○新学習指導要領の3つの観点に沿った年間指導計画の見直しを行ってきた。整理した内容を意識して実践を積み重ねる段階である。	○学習指導要領の3つの観点を意識した授業実践や学習の評価ができています。	○新しい年間指導計画や単元計画書の活用のポイントを掲示板等で提示し、基本研修者や一人一実践を授業研究で行う職員を中心に作成を呼びかける。	○掲示板で単元計画書の作成について紹介をした。今年度の研究の流れから作成を強制するものではないが、そのメリットを十分伝えきれず活用と定着には至らなかった。 ○研究グループによっては、実践への有効性を見出し活用したところもあった。	C	○引き続き、3観点での目標設定や評価を意識するためのツールとして提案していく。 ○目標設定や評価について困り感を持っている教員が多いので、研究テーマと関連付けて様式の検討を行い、全校で活用できる体制を整える。
	・ICT機器の活用	情報教育部	○学習活動でのICT機器の活用が十分ではない。 ○知的障がいのある本校児童生徒に適した情報教育について検討し、実践していく必要がある。 ○読み聞かせ等の読書に親しむ授業は活発に行われているが、調べ学習等の授業にはなかなか活用されていない。	○Google Workspaceを活用した学習が単一障がい学級を中心に行われている。児童生徒の実態に合ったアプリケーションや情報機器の活用が、重複障がい学級を中心に進んでいる。 ○児童生徒の実態に合った情報教育が実践され、事例がまとめられている。 ○図書館や図書館資料を活用した調べ学習や探究的な学習が実践され、事例がまとめられている。	○Google Workspaceの活用やアプリケーション利用に関する研修会を企画・運営する。ICTサポート事業を活用し、専門的な知識を取り入れた情報教育を進める。 ○他校の実践事例等を積極的に紹介する。情報教育を校内研究テーマに設定している先生と情報共有し、校内の実践事例をまとめる。 ○知的障がいのある児童・生徒の情報活用能力の洗い出しを行い、司書教諭等と授業担当で連携し各学部において実践を行う。	○ICTサポート事業を活用し、単一障がい学級ではプログラミングや情報モラルについての学習、重複障がい学級や訪問学級ではアプリの紹介やICT活用相談を行った。写真コンテストの開催やリモートでの集団学習により、学習活動でICT活用を進めることができた。教科・領域のICT教育グループと連携し、ICT教育分野の研修案内、実践事例の情報発信を積極的に行った。 ○リモートでの小グループ学習が効果的であった。校内で情報教育について意見交換を行う中で、重度重複障がい児童生徒のICT活用、単一障がい学級の一斉指導における支援の工夫が課題であると確認できた。校内のICT活用事例を募集したが、17例に留まった。事例を収集方法について検討が必要である。 ○司書教諭、学部図書館担当、学校司書が指導者と連携して、生活単元学習、中学部国語、高等部総合的な探究の時間を中心に図書館を活用した授業を行った。訪問学級では季節を感じられる絵本の読み聞かせを行った。実践を指導案や研究報告でまとめ、周知した。2学期末の教職員アンケートでは、図書館を活用したと回答した教職員が88%であった。	B	○引き続きICTサポート事業を活用しながら、児童生徒への情報教育や教職員研修を進める。校内巡回・ICT活用相談を年度の早い段階から実施する。 ○重度重複児童生徒のICT活用に向けて、県内特別支援学校と情報交換しながら実践を進める。単一障がい学級の集団学習を想定した端末台数の整備を進める。ICT活用事例がより多く集まるよう、校内周知や事例募集の方法を検討する。 ○今年度の図書館アンケート結果をまとめ、次年度の積極的な図書館活用に生かす。
	・新学習指導要領に対応した取り組み	訪問学級	○各教科を合わせた指導(おはなし活動)のグループ学習では、学習内容、個人の手立てや表出について話し合い共通理解することができたが、他の教科においても話し合う機会をもち、共通理解していく必要がある。 ○児童生徒の目標、学習のねらい等を総合的に見た学習内容や支援を考えていく必要がある。	○声、表情、体の動きや教育機器等で、気持ちを表出する意欲や場面が増える。 ○個々の実態に合わせて健康安全教育の取り組みを実践し、児童生徒自身が感染症予防や自らの健康について意識した態度や行動が見られるようになる。	○実態に応じた様々な感覚を生かした環境の工夫を行い、学部会や共通理解の会で学部内でアイデアを出し合い共通理解を図る。 ○グループ研究会や実践の事前事後に一人一事例研究を話し合う中で教員間で児童生徒の表出について話し合う機会をもつ。	○日々の情報交換、学習計画の話し合い等で児童生徒の表出の変化や実態に適した環境、教材、学習内容を工夫することができ、児童生徒の自分らしい表出が見られた。 ○事例研究を通して、自らの実践を整理、改善することができ、児童生徒理解につながったが、文章表現だけでは伝えきれない部分や時間足りなさが課題である。	B	○引き続き、日々の情報交換、話し合い等で共通理解を行い、児童生徒の実態に適した授業作りを行っていく。 ○定期的に授業の様子を動画にとり、見合い、意見を交換する中で、児童生徒理解、支援のあり方、教材研究、目標と評価等の視点について深めていく。

3 児童生徒の健康と安全を守る教育の推進		全学部	○感染症の状況に合わせて白兔の「新しい生活様式」の沿って感染症予防に取り組んでいる。 ○感染症予防については、教職員、児童生徒ともに意識して取り組む姿が見られつつある。日々の健康保持や防災への意識、日常生活における安全の意識についても繰り返し指導している。	○感染症対策を徹底しながらも授業や活動の仕方を工夫しながら取り組んでいる。 ○個々の実態に合わせて健康安全教育の取り組みを実践し、児童生徒自身が感染症予防や自らの健康について意識した態度や行動が見られるようになる。	○児童生徒の実態と感染の状況や県のガイドラインに合わせて、適宜本校の「新しい生活様式」を更新し、感染症対策をとりながら安全に学校生活を過ごすための工夫を行う。 ○児童生徒が健康、安全を意識するための指導、支援の工夫について、掲示板や学部会の中で共有する機会を持つ。	○換気、熱食、検温、消毒、マスクなどの感染対策に慣れ、実態差はあるが、予防に対しての意識も高まっている。集団学習が難しい時は、部屋を分けたり、リモートでの学習を実施したりと工夫を行った。 ○学校での習慣化により、感染対策に対しての意識は高まっている。防災については、身の回りのニュース等を扱ったり、訓練等を実施したりして少しでも身近に感じられるように取り組んだ。	A	・県のガイドラインにそって、今後も継続して指導、支援を行う。 ○今後もマスク着用や手洗い等指導支援していく。また、防災への取り組みも引き続き実施する。
	・防災・安全教育の推進	健康・安全部	○安全や保健の分野では、児童生徒及び教職員に対して「自分の命は、自分で守る」学習や指導について意識の向上が見られつつあるが、環境や食育の分野においても意識の向上を図っていく必要がある。	○「自分の命は自分で守る」方法を学ぼうとする児童生徒の育成を図るとともに、教職員の意識が向上している。	○保健、食育、安全、環境の各分野から児童生徒への学習指導ができるように、教職員に対して掲示板等を通じて情報発信し、理解啓発を行う。	○全体で集合する場面を時間短縮するなどの感染症予防対策をしながら、計画通り交通安全教室、避難訓練を行うことができた。 ○教職員対象に、大雨を想定した引き渡し訓練や津波発生時の新たな避難場所を検証する避難訓練を行い、振り返りをし今後に備えることができた。 ○環境や食育の情報を掲示板等で提供したり、学習が展開されるよう呼びかけたりした。SDGs関連の話題をよく耳にするようになったこともあり、児童生徒の興味関心も高まりつつある。	B	○引き続き安全に関する情報や話題等を掲示板等で啓発していき、学校全体で取り組んでいく。 ○避難訓練等安全に関する行事を、いろいろな視点で見直し、今後のあらゆる危機に対して備え、合わせて児童生徒への指導に活かしていく。

4 知的障 がい教育の 専門性の向 上・発揮		小学部	○学部会等で児童の実態、状況について共通理解する機会を持つことで学部全体で共有して指導にあたる意識を持ちつつあるが、まだ各担当が悩み等を抱え込んでいる状況もある。	○児童の実態、状況について学部全体で情報共有が行われ、学部全体で児童を見ていく意識、一貫した指導しようとする意識が高まっている。	○上・下学年会(月1回程度)の充実と報告、連絡、相談の流れを徹底することで児童の気になる状況の早期発見に努める。 ○支援部、生徒指導、SSW、SC等、各担当との連携を密に図る。	○支援部、SSW、SCとの連携を密にして、タイムリーにケース会を持ち、気になる事案の早期発見、対応に努めた。児童の実態、状況を学部会等で情報共有することで全体で一貫した指導を行い、効果が見られた事案もあった。	B	○今後も支援部等と協力し、迅速に個別の支援のあり方を検討したり、外部機関との連携をスムーズに行ったりする。 ○各担当が悩みを抱え込まないように、各学級の状況を把握するために、学年会、主任会を定期的に設定する。
	チームで取り組む支援	中学部	○校内及び外部の関係諸機関との情報の共有や連携はできつつあるが、指導・支援についての共有がまだできていない部分がある。	○生徒の行動の意味や背景、内面について話し合い、生徒理解を図るとともに、同じ方向性で指導・支援を行っている。 ○校内外の関係者と迅速に情報共有が行われ、指導・支援に生かされている。	○発達年齢や生活年齢を大切にした支援方法等について職朝、主任会、学部会等で共通理解を図る。行動の背景にある生徒一人一人の「僅れ、願ひ、思い」を大切にした生徒理解に努める。 ○具体的な指導・支援方法について、校内(支援部、生徒指導、SSW、SC等、各担当)及び外部の関係諸機関との連携を密に図る。	○生徒の行動の背景や内面を大切にした生徒理解をして、同じ方向を向いて生徒の指導に当たるなど、お互いに協力しながらチームで取り組むことができた。 ○支援部と連携して適宜支援会議等を行い、教員間、関係機関と情報共有をしながら取り組むことができた。職朝等で生徒の情報交換、共通理解が積極的に行われ、指導・支援に生かすことができた。	A	○次年度以降も継続することが大切。生徒や保護者の思いや困り感に寄り添い、一緒に考えていくことを大切にしたい。学校卒業後を意識して、生徒が早期から必要なサービス等を受けられるように関係機関等と連携していくことも必要である。 ○全校で共通理解が必要な生徒の情報共有の方法や記録等について再検討する必要がある。
		高等部	○学年・学部だけで指導支援するのではなく、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなど校内資源につなげる体制が整ってきている。	○気になる児童生徒早期発見のための教師の視点(チェックシート)や情報共有シート等を活用して校内で情報共有することで、指導・支援が素早く行われる。	○職朝、主任会、学部会等で生徒の情報を共有するとともに、連絡、相談し合う体制を構築することで、学年や学部で連携しながら指導・支援にあたるようにする。支援部と連携し、ケース会等で支援について検討することで、共通理解のもと指導にあたる。	○気になる事案に対して、学部会や職朝で情報を共有することができた。支援部が中心となって必要に応じてケース会も実施した。ケース会では、支援部協力のもとデータをとり、行動の意味や背景などについて分析した。学年で共通理解しながら進めることができたが、学年によって対応教員に限りがあるため、学年を超えての協力体制づくりにおいてはまだ十分ではない。情報共有シートは、記録として残せたが、日々の活用としては十分ではなかった。	A	○情報集約、共有の仕方については支援部と連携し、手立てを考える。 ○今後も効果的な情報共有及びチームでの支援の在り方を検討する。
4 知的障 がい教育の 専門性の向 上・発揮	・校内支援の充実 ・センター的機能の発揮	支援部	○教育相談と生徒指導は情報共有シート等を活用することを通して連携し、校内支援につなげることが多くなった。しかしキャリア教育の視点での切れ目のない支援や連携体制はまだ整っておらず、進路等に対するの支援を模索中である。 ○校外への教育相談や通級指導等で支援体制は確立してきている。しかし、校内資源を活用した校外支援もおこなっているが、校内資源の把握や発信がまだ不十分である。	○生徒指導とキャリア教育と教育相談の連携体制が整い、児童一人一人の自立と社会参加につながるような校内支援体制が準備できている。 ○校内資源を活用した校外支援体制が定着している。	○ケース会等を通して関係機関につながる校内教育相談体制を整えたり、教職員と学習参観や会議等を通して繋がりをもつことを通じて相談しやすい環境を整えたりする。 ○キャリア教育の視点で、進路研修会や職場見学を実施し、小学部から高等部までのキャリア教育の情報を校内に発信する。 ○校内資源の情報を収集しながら人材を把握し、教育相談に活用する。それを支援部だよりを使って情報発信する。	○生徒指導上の課題について出前授業を実施したり、教育相談であがった困り感についてカウンセリングやケース会議等の各会議につなげたりすることで、課題の改善が多くみられるようになった。生徒指導と教育相談とキャリア教育の校内支援体制が整ってきた。 ○進路指導では、「進路の手引き」を使って白兎の進路について説明を行ったが、年間を通した情報発信が少なかったため、理解が不十分な面もあった。進路に関する連携体制はまだ充分とはいえない。 ○校内資源の活用に努め、校外への教育相談を行い、相談件数が増加した。	B	○進路指導上ででてくる課題やつけたい力など、教員だけでなく保護者に対しても理解を進める機会を設ける。 ○校内への情報発信に努める。
	・チームで取り組む支援	研究部	○コロナ禍で研修の機会が十分ではなく、校内で専門性向上のための保障が必要である。	○個々の実践や校内研修を通して、知的障がいの児童生徒への理解が深まっている。	○実践を深めながら個々の専門性が向上するよう教職員のニーズに応じた小グループを編成し、月1回グループ研を開催する。各グループと連携して進捗状況を把握する。 ○15分研修を含めた校内研修の充実を図るため、時期や内容を検討・改善し参加者の増加につなげる。	○小グループで実践を共有することで、支援の共通理解を図ることやアドバイスを受け授業改善を行うことにつながった。 ○15分研修は計画通り実施できた。毎回30名程度の参加があった。	B	○来年度も、テーマに応じてグループを編成し、研究日の活性化を図る。 ○アンケートをもとに15分研修の内容を再検討し、より日々の実践に活きるものとする。
5 業務改善の取組	○分掌業務の見直し ○担任の業務量と副担任の業務量のアンバランスの解消	学校全体	○分掌の再編が学校運営や業務改善に生かされているか検証する必要がある。 ○担任業務と分掌業務(副担任業務)について均等に業務分担できたか検証する必要がある。	○分掌再編を行ったことで、業務の改善がみられた。(会議・行事等の精選) ○担任と副担任の業務分担はある程度バランスがとれている。	○分掌再編した内容について年2回の点検する。 ○担任・副担任の業務分担について年2回の点検する。	○会議時間の削減や行事の精選はできてきた。 ○コロナ禍による学習等の変更に対応するための新たな業務(消毒、給食配膳、小グループでの学習活動等)があり分掌再編が業務改善につながっていることは検証できなかった。	C	○ウイズコロナを見据えた業務改善が進むように、学部主事や分掌部長と連携し、業務量の見直し計画を立てる。

評価基準 A:十分達成 [100%] B:概ね達成 [80%程度] C:変化の兆し [60%程度] D:まだ不十分 [40%程度] E:目標・方策の見直し [30%以下]